

第20回UJNR水産増養殖専門部会 日米合同会議議事要録

第20回UJNR水産増養殖専門部会日米合同会議は1991年10月28日（月）～29日（火）、オレゴン州立大学ハットフィールド海洋科学センターにおいて開催された。シンポジウムの課題は「魚類の栄養」である。

I. 事務会議

米国側前部会長C.Manken と日本側部会長 高木健治からそれぞれ開会及び歓迎の挨拶が述べられた後、両国の出席委員及びオブザーバーが紹介された。C.Mankenが部会長を退き、J.McVeyが新たに米国側部会長に着任したことが報告された。事務会議は日米両部会長の合同座長で進められ、書記として鈴木徹 日本側副事務局長とJ.Jacobs を選出した。また、UJNR水産増養殖専門部会における両部会の各担当者を以下の通り確認した。なお、米国側部会から、各年度のシンポジウムの発表課題および適切な講演者を選択するために、新たにプログラム担当者（Program chairman）を設けたいとの提案があった。この点について、米国側に新たな担当者を設け、日本側は事務局長が従来通りにその役割を果たすことで合意された。次に、議事日程、シンポジウム議題および司会、現地検討会のスケジュールを異議なく了承した（別紙1、2、3、4）。

	（日本側）	（米国側）
共同研究担当	和田克彦	J.McVey
研究者の交流	鈴木 徹	W.Dickhoff
文献交換	前田昌調	D.Hanfman
出版	小西光一	M.Collie

1. 研究者交流

UJNRに係わる研究者交流は1990～1991年も継続して行われ、日本側から6名の研究者が米国を訪問したことが紹介された（別紙5）。

2. 文献の交換

日本側から113編の論文とそのリスト10部、ならびに1990年度版漁業白書（英語版）を近くJ.McVeyに送付予定である旨報告された。米国部会から米国側連邦機関の論文リストが提出された（別紙6）。論文リストのより有効な利用を計るために、今後日米両国のリストを合本することが合意された。

3. 共同研究

増養殖研究機関の一覧が日米両部会で既に交換されたことが報告された。米国側から、今後の共同研究の課題として、増養殖と環境、バイオテクノロジーおよび熱帯地域での増養殖等が提案された。日本側もこれらのことに関心のあること、また共同研究についての可能性について議論する余地のあることが説明された。

4. 出版物の刊行

米国側出版担当者から、第17回(1988年)合同会議の報告集は、NOAA Technical Report NMFS 102として1991年5月に刊行され、100部が広瀬事務局長に発送された旨報告があった。第18回(1989年)合同会議の原稿については、編集が既に完了し、1991年12月に刊行される予定であると報告された。

R. Svrjcekは、1991年12月をもって出版担当から退き、M. Collieが新たに担当する旨報告された。

本年度より、合同会議報告集の著者は、原稿は電算機ディスクに入力して提出することとなり、そのための説明書が著者あて配布された旨報告された。また本年始めに合意された通り、米国側出版担当者から、フォーマットしたディスクを著者に配布すると報告された。

5. 合同シンポジウム課題次期5か年計画

UJNR水産増養殖専門部会合同シンポジウムの次期5か年の課題について、次の通りに合意された。

- 第21回(1992年) 水産増養殖における環境管理
- 第22回(1993年) 放流魚と天然魚との相互作用
- 第23回(1994年) 溯河性および降海性魚類の生活史の制御機構
- 第24回(1995年) 増養殖と環境および人間の健康
- 第25回(1996年) 水産増養殖への新魚種；現状と将来

5. 第21回合同会議の開催

日本側事務局長より、次期第21回合同会議について、11月中旬に京都で開催する計画であると報告された。

6. 第22回合同会議について

米国側部会長より、第22回合同会議は、1993年9月にアラスカ州で開催する予定であると報告された。

7. 現地検討会

現地検討会のスケジュールについて米国側より説明があった（別紙7）。

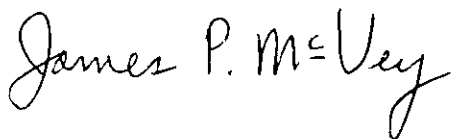
II. シンポジウム

シンポジウムはオレゴン州立大学ハットフィールド海洋センターで開催され、14編の研究発表があり、活気あふれる討論が行われた（別紙2）。

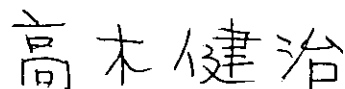
今回のシンポジウムならびに現地検討会の開催について尽力された関係者各位に日米両部会長から謝意が表明された。

オレゴン州オレゴン州立大学

1991年10月29日



ジェームス マクベイ
米国側部会長



高木健治
日本側部会長